

SKY MOMENTS

Sirius Presents Photo Exhibition Vol.471

2012年12月13日(木)~12月19日(水)

10:00~18:00 最終日15:00まで(日曜休館)

アイテムフォトギャラリー「シリウス」

東京都新宿区新宿 1-4-10 アイテム本社ビル2F TEL.03-3350-1211
東京メトロ丸の内線 新宿御苑前駅そば

入場無料

入選者発表および講評

「SKY MOMENTS 2012」展応募作品の中から、次のみなさんの作品が正会員の作品と共に展示されることになりました。

- ◆秋山 修一◆伊藤 晴隆◆伊藤 学◆上河 聡◆笠巻 敏勇◆片桐 桂一
- ◆越野 正太◆児玉 尚昭◆近藤 晃次◆櫻井 純一◆佐々木 豊◆佐藤 憲彦
- ◆佐藤 佳道◆山納 裕幸◆杉山 晶彦◆関崎 晋史◆武田 義則◆田中 俊明
- ◆豊田 将之◆中川 和幸◆中村 浩史◆延原 真◆細淵 達也◆松下 将士
- ◆三浦 泰彦◆米山 俊一 (敬称略順不同)

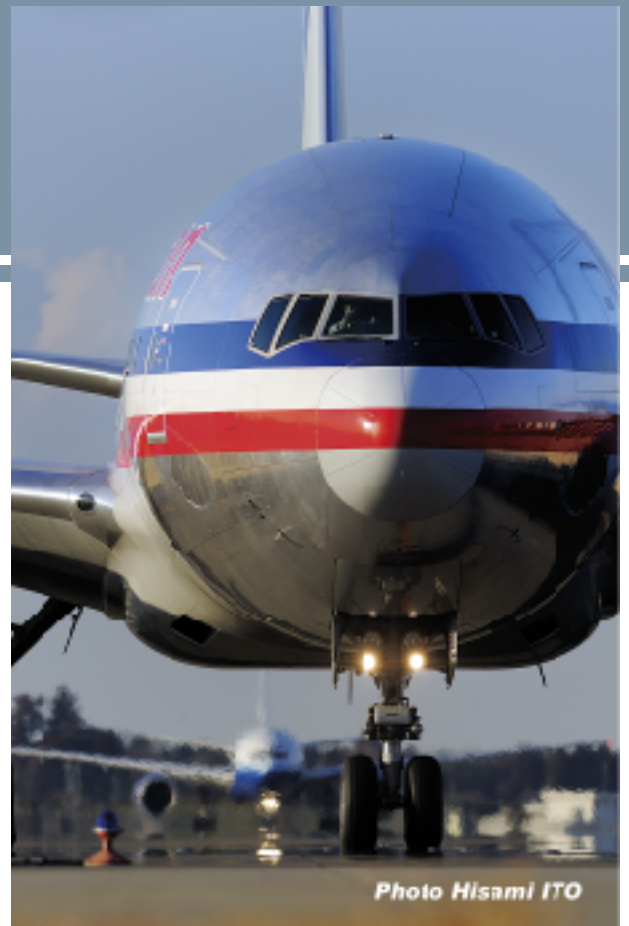


Photo Hisami ITO

選考後の印象

日本航空写真家協会会長 瀬尾 央

応募作品は2極化しているようです。今回の写真展は、展示者誰もが1人1点ですが、1人5点の応募を認めました。極論すれば、5点全部通していい応募者もいれば、おそらくは学ぶ方法、修練の方法が、分からずも撮っていると思える応募者もいることを感じました。いいものとは何か、技術以前の、物事に対する向き合い方の問題があるような気がします。撮影にあたって、画像補正にあたって、こうあってほしい、こうあって然るべき、といったことへの希求、それがほしいと思います。

好成绩の層では、1点勝負ではもったいない、技量に見合う発表の方法が他にもあっていいという印象を強くもちました。私も含め、プロを出し抜く何かが見られるからです。ぜひさらに上のレベルを目指し、近い将来、出版などもターゲットに入れた写真活動を続けてもらいたいです。

JAAPでは、応募の敷居を低く設定していて、基本審査を小さな2Lプリントで行っています。これが裏目に出たという印象も感じます。あるいは、銀塩時代遠くりにけり、ということもいえるでしょう。簡単にいえば、大伸ばしプリントの怖さを、過半の応募者が経験していないということです。

今回の展示作品は、長辺530mmにおよぶ全紙サイズのプリントで行います。プロの仕事として45~60cmにおよぶ大判カレンダーの制作にかかわっていると、フォーカスの

甘さにせよ、ブレにせよ、アレにせよ、隠しおおしよのないシビアさに常に直面します。過去、そのおかげで、図柄の良い画をどれほど捨ててきたか、です。

自戒をこめていますが、甘さやブレは、あるか・ないか、ゼロか否か、でしょう。その意味で逆説的にデジタル的です。銀塩フィルム時代は、これをルーペで判別していました。甘い、チラとでもその気配があったとします。現在ポピュラーなアンシャープ・マスクなど、往時は使いようもなかったわけで、素のままです。結果的にどのように現れるか、A4程度のサイズでは気配にすぎないにしても、大サイズとなれば誰にでも分かるものとして現れてきます。まずは妥協を許さないと考えるべきでしょう。

最近のデジタル写真は確かに高性能化しています。しかし、ひと世代前のAPS-C機で撮って、その画像の半分程度のサイズ、画像面積にして1/4程度しか使わない大幅なクロップをして2Lプリントを作る。あるいはweb画像にする。その域では難点を隠せないわけではないけれども、しかし大サイズ・プリントとなると、気配が気配ではなく、現実のものとなってしまいます。

銀塩フィルム時代は、特に35mmフィルムでは、大幅なトリミングは許されませんでした。ファインダーで見たとおり、写ったとおりに努めて使い、トリミングをしても傾きの修正程度に留めました。だから撮影時

からあるべき姿を追い求めたわけですから、いくらシャープであっても、大きく切り取ればフィルムの粒子が顕在化します。銀塩時代からの愛好者にとっては、これは身に染みた素養というものだったでしょう。

しかし、くっきりとシャープな写真だけが写真かといえ、それはイコールではありません。今回の応募作にも、オリジナルRAWファイルを送ってもらい、撮影者の同意を得てJAAPの側で大幅改造させてもらったものがあります。軟調現像し、空も機体も調子を出し、傾きを加えた再トリミングをした上で、白黒写真化し、コントラストを強め、さらに画像にアレを加えたのです。普通の処理とは逆方向ですが、画的パワーは格段に増力されたと思います。

こうしたことから、使用する画像編集ソフトが可能とすることを、その能力の端から端まで使ってみて、何が出来るか、どんな場合に、どのような設定が生きてくるか、日頃から実験してみたいです。カメラ自体の設定でもそれがいえます。デフォルトの設定に留まることなく、機材やソフトの性能を、端から端まで使ったとき、新発見が生まれることもあるからです。

そのためには、繰り返しますが、こうあってほしい、こうあって然るべき、といったことへの希求がほしいのです。理想的な姿を先に思い描くことが大切だと思うのです。